

いつまでも勉強心を、 そして謙虚な人に

生物生産学部長 角田俊平

「卒業お目出度う」諸君へ、そして特に諸君のご両親へこう申し上げた。

これまで何度か卒業の日を迎えているが、この度の卒業が本当の出発の日、人生の大きな節目であり、自立への第一歩である。今の社会は一つの金科玉条で処せるほど単純ではない。タテの糸とヨコの糸が複雑にからみ合っている中で、己れの座標軸をしっかりと定めることがまず大切である。大学では理論の勉強であったが、これからは実践に即した勉強が要求される。十年、二十年たつて、勉強したか、しななかったかが大きな差となって現れる。自らの役割と課題を的確に認識し、若者特有の柔軟で創造的な発想と活力を発揮するように心掛けてもらいたい。さらに信頼される人物、汗を流すことをいとわない人物であつてほしい。

ところで、大学を卒業して就職するとき、社会人になるといふが、会社人になるとはいわない。そこで社会人としての心掛けを一つ誰よりも己に厳しく、謙虚で人に思いやりを持つて接すること。例えば、自動車に乗ったとき、むやみやたらにクラクションをならさないこと。そうすればスピードは出せないし、事故も少なくなる。

「タフでなければ生きてゆけない。優しくなければ生きてゆく資格がない」とはレイモンド・チャンドラの小説の一節である。高い理想を追い求める「志」と、弱者に配慮する「心」を忘れないうでほしいと思う。

自己を見つめ 自己に忠実に

学生部長 上里一郎

卒業（修了）おめでとう。

諸君にとって広島大学ですごした数年間はどのようなものだったのでしょうか。何を得て卒業し、何を求めて社会へ巣立とうとしているのでしょうか。

諸君に、私が高校時代からよく繙いた書から一つの文章を贈ります。この書は、第二次大戦に参戦し非業の死をとげた学生の苦悩と生きざまをまとめたものです。

「友人が」余命いくばくもないのに、「複素函数論」、「仏蘭西語四週間」を読み、歌句をものしていたのを知って深く胸をえぐられるような気がした。我々は最後まで自己に忠実でなければならぬ、自己を伴って生きるほど無残な生き方があるうか。

再び、「ドイツ戦没学生の手紙」を読む、……彼らは真摯だ。塹壕の中で蠟燭の灯の下で、バイブルを読み、ゲートを読み、ヘルダーリンの詩を誦し……（日本戦没学生記念会編 きけわだつみのこえ 岩波文庫 一九八二年より引用）

大学で単位を取得するだけでは、教養はいうまでもなく、自己を知ること、何のために生きるかも見えてこないはずだ。自分なりに目的意識を持ち自発的に努めることが大切でしょう。諸君の幸運と健闘を祈ります。